

【執筆者の紹介】

生年月日

大正十一年六月二十三日

昭和十二年三月

用瀬尋常高等小学校卒業

同 十一月

就職 日本国有鉄道

十八年一月

退職

同 一月

現役兵として山砲兵第一二五連隊入営（羅南）

同 二月

満州第七国境守備（黒河）

十九年八月

兵長

二十年四月

技術伍長

同

第一二五師団司令部（通化）

八月

停戦（通化）

同 九月

抑留（吉林）

同 十月

同 ウラジオストック

二十三年五月

復員 舞鶴

同 六月

復職 日本国有鉄道

五十五年四月

停年退職

（鳥取県 谷村 憲一）

戦争と抑留

島根県 星野 誠 一

入隊

いよいよ昭和十九（一九四四）年一月一日は入営日である。今日は十月三十日。同郷の先輩、新竹五郎さんの招待を受けて、新京神社近くのお宅へお邪魔することにした。更けゆく夜も気に留めず盃を重ねるほどによもやま話に花が咲く、そして思い出を秘めつつ寝につく。明けて三十一日朝、新京神社前広場に集合する。既に四、五人集まっていた。新京駅のプラットフォームに上ると、大連方面より進行して来た客車の窓から顔を乗り出して「おいで、おいで」している者がおるではないか。近寄って見ると、十七年三月に別れた、旧制三刀屋中学校で同級生であった奥井君ではないか。驚きと同時に列車に飛び乗り、同席してい

ろいろと話を聞けば、十七年三月卒業とともに大連の満鉄本社技術部に就職し、現在に至ったとのこと。積もる話を一通りしたところで入隊場所である東寧県東寧駅に着いた。奥井君は歩兵、私は砲兵、無事を祈り、再会を誓って右と左に別れた。(奥井君は、ソ連参戦により東滿のソ満国境、勝鬨(カチドキ)山陣地の戦闘において二十年八月十六日玉碎、名誉の戦死を遂げられた)

大東亜戦争も、十九年十一月になってくると関東軍の移動も激しくなり、ポイント、ポイントは現役兵の精鋭をもって堅め、手抜きのできるころは齡四十歳前後の補充兵で補うやり方の方針転換し、精鋭部隊は続々と南方戦線へと移動して行ったので、国境線はますます手薄なところが多くなっていた。

ソ連のスパイ、我が軍の逃亡兵、夜には照明弾と、次第に不気味さを増してくる一方でした。二十年五月八日、枢軸国のドイツが降伏してからは六月、七月と進むにつれてソ連軍の極東方面への

移動が一層激しさを増し、その対策に我が隊の司令部もお手上げの格好である。

二十年八月九日午前零時、極東のソ連軍は一方的に「日ソ不可侵条約」を破り、ソ満国境を越えて怒濤の進撃をしてきた。劣悪な装備の日本軍と、兵力百五十七万人、火炮二万六千門、戦車・自走砲五千五百両、航空機三千四百機と極めて強大、優勢なソ連軍とでは、明らかに勝敗は目に見えていた。

武装解除

二十年八月十七日、我々の砲兵隊は石頭近くの山中で終戦を知った。「ウスウス」は心の中で予想していたが、いよいよ現実のことになってくると、ぼーとして頭の中は真っ白になるし、心は激しく動揺するし、大本營の命令であるからと心を静めようとするけれども、何となく不安が襲っては去り、襲っては去り……。神国日本、二千年來負けたことがなかったから無理もなからう。ただ

ただ心に言い聞かせるより他に道はなかった。牡丹江省東京城街において武装解除することになり、ソ連軍の指揮下に入る。戦友の皆が、ただ黙々と押し黙り銃を置く姿が大層哀れでならなかった。

東京城街の広場に集結した日本軍将兵は一千人単位に編成替えされ、牡丹江の仮収容所に向かつて行軍することになった。八月の真ただ中、炎熱の中、食糧事情は悪いし、落伍者続出で隊列は乱れるし、ロスケの歩哨からは怒鳴られ、大変厳しい行軍が続いた。初めのうちは落伍者が出ると戦友がかばい合っていたが、次第に皆が疲労し、我が身も大変になってくる。落伍者からは、自分らには構わず行ってくれと言われ、それじゃ一足先に行くから必ず後から追って来いよと別れる。後ろ髪を引かれる思いで、後を振り振り返り牡丹江へと隊列は進む。そして疲労困憊、へとへとになって仮収容所に到着。収容所といっても名ばかりで、何か大きな倉庫のような建物が幾棟も

並んでいて、これから先の苦勞が思いやられる光景である。案の定、ロスケの略奪が始まった。時計、万年筆、革の財布、革の長靴と、自動小銃を突きつけて「ダワイ（よこせ）」である。夜になると、あちらこちらで銃声の音がする、恐らく略奪であろう。「ダワイ」を断れば撃ち殺される。嫌な思いを十日ばかりして、いよいよ列車に乗って出発である。

「東京ダモイ」に騙されて

九月とはいえ、ここは北滿、肌寒い。十五両以上と思われる有蓋列車が牡丹江駅で我々を待ち受けていた。ロスケの歩哨が我々に向かって「ヤポンスキー（日本人）、東京ダモイ」と口々に叫んでいる。本当に帰国できるのだろうか。

貨車には、帰国に必要な軍馬や大八車のような車両まで積み、我々には毛布や防寒服まで支給する。日本に帰国するのにこのような物資は要らない、これはおかしい。シベリア奥地に連行され

るのでは……、一人心が騒ぐ。

ロスケには今まで散々騙されてきた。我々はこれまでソ連に対し何をしてきたか、悪いのは向こうではないか、一方的に日ソ不可侵条約を踏みにじり、たかが一週間の戦争で、満州国において略奪、暴行、強要等、悪の極みを尽くしたではないか、この上まだ何をしようとするのだ。ここに来て不安な思いが募るのは私一人ではなかったと思う。

そして、我々を乗せた貨物列車が動き出した。

牡丹江からハルピン回りで大連港より船で日本に帰すのだろうと、皆、想像を逞しくして列車の行く手を見つめる。ああ列車が止まった、あ、また動き出した。おかしい、方向が違う、まったく逆の方向である。ハルピンは西の方角であるのに、列車は東の方向に進んで行く。

貨車の中の騒ぎがやみ、静かになる。しかし、またよい方に解釈する者がいて、列車はソ満国境の街、綏芬河を越えてシベリア鉄道を南下して、

ウラジオストックの港から日本海を横断して日本に帰国させるのだろうと予想を立てる。列車は止まったり進んだりしてソ連領に入る。夜である。列車が止まった。動かない。恐らくここはシベリア

鉄道と支線の綏芬河線の分岐点でもあるウオロシーロフである。真夜中になって列車が動き出した。どんどん進んで行く。しかし、空を見上げ北極星を眺めると、この列車の進行方向はウラジオストックではなく、明らかに北の方向、ハバロフスクの方に進んでいる。また我々の予想は裏切られた。だが、人間というものは最後の最後まで望みを捨てない。ハバロフスクから今度は船でアムール川（黒龍江）を下って樺太の方から帰すのではないだろうか、と。我々を乗せた有蓋貨車の中はいろいろと可能性を探って、ああでもない、こうでもない、と、談義に花を咲かせ大変な騒ぎである。急に列車が止まった、今度はなかなか動かない。そのうち遠くの方でポーウという汽船の汽笛のような音がしてくる。これは本当にうわさ通

り、乗船して日本海を渡り日本に帰国させるのではないだろうか、と急にまた貨車の中が騒々しくなった。だが一日たち二日たち、とうとう一週間というものの貨車生活を余儀なくされた。

すると、それから数日たったある日のこと、「降りろ」「降りろ」と怒鳴る声が聞こえてくる。何はともあれ下車しようと、あちらの貨車、こちらの貨車と三々五々に集まって来る。そうこうするうちに「整列せよ」との号令がかかる。そして「前進」の号令である。待ちに待った言葉である。ところが注意してよく見ると、アムール川（黒龍江）とは真反対の山の方向に向かって行進して行く。そうしてしばらく進むと、割と大きな街、コムソモリスク市を横切って、だんだんと山手の方向、街の郊外へと進んで行く。ややあって大きな声で「止まれ」の号令がかかる。一千人の隊列が一斉に足を止めた。

收容所生活の始まり

町外れの寂しい場所、有刺鉄線の二重張りの囲みの中に丸太造りの平屋の建造物が何棟か建ち並んでいた。初めて見る異様な建物、これが私の数年間生活の本拠となった收容所であった。ある程度想像していたが心の動揺はいかんともし難く、ただただ茫然として立ち尽くすのみであった。今まで心の中にかすかに灯し続けてきた光明がふっと消えて、お先真っ暗な世界ができた感じがしてならなかった。二カ所の望楼からはロスケの若い兵隊が「マンドリン銃」を肩にかけて、ジッと我々を見張っているではないか。「東京ダモイ」という一縷の望みも今や完全な形で断ち切られ、夢のない寒々とした抑留生活が始まろうとしていた。

食糧と病院

冬のシベリアは夜の明けるのが遅い。朝七時ころ、点呼に集合の合図が鳴る。外は暗い。五百人

の隊員が五列縦隊に整列してロスケの点検を待つ。ロスケの兵隊は頭脳が悪いので、五列で人員を確かめてから出発する。数が合わないと出発が遅れる。冬場は氷点下四〇度と気温が下がる。防寒服に防寒短靴、足踏みして待たないと足先が凍傷になる。大変である。作業場のある伐採場まで約四キロメートルくらい。出発すると皆、下を見て歩き出す。腰には手製の空缶をぶら下げ、外套はポロボロ、尾羽打ち枯らしたタカのごとく、見られた格好ではない。ところで下を向いて歩くのは、道路上に馬鈴薯パレイシヨが落ちていないかと思ってるからだ。道路は吹雪で雪は吹き飛んで余り積もっていない。ピンポン玉くらいなイモに雪の粉がくっついており、馬糞と少しも区別がつかない。また煙草を吸われる方は煙草の吸い殻が落ちていないか、この人たちも下ばかり見て歩く。そして一つでも馬鈴薯みたいな物があれば、みな飯盒の中とか雑のうの中に入れて、また下を向いてトボトボと歩いて伐採場へと向かう。現場に着く

と拾い集めた物を飯盒炊きをする。でき上がると取り出して食べる。たまに炊いていて何か異様な臭いがして飯盒の蓋を取って見ると、凍っていた馬糞が温められて熱湯で溶かされ砕けてばらばらになり、他の馬鈴薯にも移り香がして、その飯盒の分は全部だめになるので、そんな時は皆、がっかりしてしまう。シベリアの冬の路上は粉雪があり、それが馬鈴薯や馬糞にくっつくから見分けがつかない。実際、我々抑留者は食べる物にはまことに真剣であった。

収容所の食事は量は少ないし栄養がないので、体が衰弱してくるのが分かるような気がしたので、春になるのを待ってマムシとかシマヘビとかを捕らえ、皮をはいで骨ごと焼いて食べた。またマムシの目は、栄養失調で鳥目になった者には特に珍重がられ、患者の方にはよく作業現場からマムシの目を取って持ち帰ってあげた。軽い症状の鳥目の方ですとマムシ一匹分、即ち目の玉二個飲めば大体快復したものです。カエルも食べた。シ

ペリアのカエルは腹の赤いのが多い。皮を剥いで焼いて食べると、小鳥の肉のように香ばしくて美味しかった。

また、農作業場近くには川が流れておった。その川べりには、とつともなく大きな傘のようなフキが生えていて、それを取って飯盒で湯がいて塩を入れ、少し苦かったが我慢して炊いて食べた。いろんなキノコを毒キノコと見分けながら炊いて食べたり、その他食べられそうな物は何でも食べたから私は胃腸を壊してしまい、下痢すると風呂場（ドラム缶風呂）に行き、消し炭をかき集めて、それを石を金づち代わりにしてコンコンと叩いて粉にし、下痢止めに飲んでみた。作業に行って腹具合が悪くなると、その都度そういうことをしていたら、とうとう腸の方に傷がついたのか血便が出るようになり、熱が出て作業に出られなくなった。ソ連の女医が来て診察すると、「熱が下がらんから、お前はマラリアだ」ということになって、「入院しなさい」と言うのです。

ところが日本の軍医さん（山根少尉殿）は、「お前はマラリアではない、腸に傷があり、そこから熱が出ているので、大腸炎だからそんなに心配することは無い。病院に入ったら作業に出なくてよいかから入院せい、入院せい」と入院を勧められて結局病院に入院した。病院ではマラリアというところで直ちに隔離病棟に入れられた。ところが一週間たったら平熱に下がってしまい、今度は普通の病棟に移された。

そこにはいろんな患者さんが入院しておられ、中でも佐世保出身の前田兵長（当時四十五歳）さんなんか栄養失調で小便が極めて近く、内務班におられた当時は多いときで一晩に便所に十三回も通っておられた。入院されてからは小便が出るのが分からんらしく、いつもワラ布団（軍隊の敷布団）がブツブツ湿っておった。栄養失調になると、本か何かで見たが、死ぬ前になると寝いて手を合わせる、と。私の隣にいた補充兵の田崎さんなんかは、死なれる一週間ぐらい前までは食

べること到大変関心があつてガツガツしていた方だったのに、死ぬ一週間前あたりからは何も欲しくないようになり、それで彼言うのに「俺、今夜死ぬかも分からんよ」と夜中に言う。「そんなことはないよ、日本に帰るまでは何としても頑張らねばいけないよ」と。言い聞かせる。朝になって隣に寝ているはずの田崎さんを見ると冷たくなっている。これには大変驚いた。彼が昨晩言ったことは本当のことであつたなあ、と、ただただご冥福を祈るのみであつた。

私が入院中、病院で見かけたことですが、栄養失調、結核、壊血病、発疹チフス等、病気で毎日のように五、六人から十人ぐらいの戦友の方々がお亡くなりになり、時には一日に二十人も亡くなられた日もあつた。いつも朝になると遺体を迎えにトラックが来まして、丸太のように硬直した遺体、冬なんか寒さが厳しいので当然すぐ硬直します、入院患者のうち比較的元気な者が硬直した遺体の頭と足を持って、一、二、三と掛け声をかけ

て待機中のトラックに投げるようにして乗せ、時には満載して墓場の方へ乗せて行くのを目の当たりに見て、本当に哀れだなあ、この光景をご遺族の方が見られたらどんなお気持ちであろうかと思つて、心からご冥福を祈るのみでした。

伐採作業

私たちの伐採現場は、収容所から山の手の方へ約四キロメートルぐらいの距離でした。二十年の十二月から明くる年の十二月まで、約一カ年間作業をやりました。夏場は蚊とかブヨとかに襲われることがあつたが、それでもまだ何とか我慢することができた。ところが冬期になると大変です。私は八分隊の副班長で、分隊長は柴田軍曹という。三十八歳の補充兵上がりの方でして、作業になると、いつも何だかんだと理屈をつけて絶対出ない。それで私の分隊は私が引率を続ける。隣の七分隊には生駒伍長という同年兵の副班長がおりまして、この分隊も班長が石田伍長という大阪天王

寺の出身でしたが、この人も補充兵上がりの方でして、これも作業には怠けて出ません。結局伐採場では生駒君と二人で作業を組んで、先頭に立ってどんどん伐採にかかります。戦争が終わって階級章を外すと兵隊がなかなか言うことを聞き入れず、思うように働いてくれない。かと言って作業をサボルとノルマが上がらず、ロスケの監視兵から銃を持っておどし怒鳴られる。

道具は二人引きのノコと斧とで作業をやる。ノコでどんどん木を倒していつて、斧でトットトットと枝を外して二メートルに切つて、高さが一米ートル、長さが二メートルに積む。それを仕上げてやり遂げるとノルマが一〇〇%になる。これはもちろん二人の共同作業ですので、二人が力を合わせてしないと、とてもノルマ一〇〇%はおろか五〇%もできない。

天候が悪く気温が氷点下四〇度以下に下がって、その上また吹雪でも来れば、気温は体感氷点下七〇度、八〇度になる。とても作業は思うよう

にならない。そんなときは切った丸太の積み方に小細工をする。枝の多いシラカバの木を一本切り倒すと、その枝と枝とを組み合わせて高さを作り、また幅も作る。普通平地に二メートルに切った丸太（直径十センチから二十センチ）ばかりで積むと、なかなかノルマが一〇〇%になりませんが、このシラカバ方式で積むと、一〇〇%が割とたやすくできる。そういう皆、いろいろ工夫して少しでもノルマの%を上げようと努力した。

気温も十二月になると、大体普通氷点下四〇度ぐらいには下がります。しかしロスケは、温度が四〇度、五〇度に下がっても、今日は三八度とか三九度とか言つて作業にかり出す。規定によると、大体気温が氷点下四〇度を超すと作業に出さないようになってる。実際四〇度以下になると寒くて伐採場に行っても仕事にならない。まず現場に着くと皆すぐ薪集めをする。枯れ枝など薪をどんどん集めて来ては、ドーウと燃やして暖をとって体を温めてから作業にかかる。ソ連の監視

兵にして見れば、そうしたことが気に入らない。

「作業にかからないで焚き火にばかり当たっている」と、ロスケの兵隊は小銃を持って来てはおどす。だからノルマがなかなか達成できない。私はいつも五〇%ぐらいの食事しか食べていなかった。体格のいい体力のある元気な方は、腹いっぱい食べたいために毎日の仕事を無理して一〇〇%から一二〇%ぐらいの作業をする。ところがそういう食事の量を増配されて食べても、腹ばかり膨れて満足感は満たすことができるかもしれないが、栄養食でないためかえて死ぬ率が多かった。結局、体力にまかせて仕事をされた戦友の方がバタバタ倒れていかれた。体の弱い者は、仕事をしなくとも殺すまではせんから、まあいいかげん仕事をやろうと、ぼつぼつ作業をした者がやっぱり後まで残った。

冬季は夕方はずぐ日が暮れるので、仕事が終わると早く集合して、また来た四キロメートルの道を収容所まで帰らねばならない。栄養失調のよう

な者達が、防寒短靴みたいな物を履いて、防寒服を着ていては、なかなか歩けない。体感温度氷点下七〇度、道路は寒波でさら地みたいなサラサラ雪であったが、それでも山手の方はある程度、四十センチから五十センチぐらいは積雪があります。その雪の中をボツボツ歩くのは大変難儀なものであった。悪天候で作業条件が悪くノルマの成績が上がらん日には、ロスケの兵隊が機嫌を悪くして「ビストレー、ビストレー（早く、早く）」と言って、我々の後を追う。いくら早く帰れ、早く帰れと言われても、足が言うことを聞かない。いつも冬場は暗くなって収容所に帰る。それから点呼をやるので一層遅くなる。

ある日のこと、作業から帰って、いくら点呼をやっても作業人員を点検しても、どうしても一人人員が合わない。誰だ誰だ、誰がおらんかと、よく調べて見たら、藤田がおらんじゃあないか、ということになった。この藤田さんは補充兵上がり年齢は三十八歳で、青森か秋田、東北出身の方

でした。早速捜さねばということになり、代表者と、ある程度体力のある者が、私もその中に入つて、今日作業をやつた現場に暗い夜道（雪道である程度は助かった）を捜しに戻つたのですが、現場近くの山の中に半分くらい入つた所でしたか、藤田さんが倒れているのを発見し、体力のある者が交代交代で肩車に背負い、收容所に連れて帰つた。しかし既に全身凍傷で硬直が始まつており、どうすることもできなかった。ただただ哀れというほか言葉もなし。「安らかに成仏あれ」と祈るのみであつた。

朝、收容所を出発して伐採現場に着いたとたん、体力のない者は寒さのためよく倒れた。倒れるとすぐ焚き火をして体を火であぶつてやる。体を温めてやるとまた元氣を取り戻す。しかし大した仕事にはなりません。伐採というのは夏場は蚊などに苦勞するが、冬場はなかなか大変な作業でした。

荷役作業

アムール河（黒龍江）をサハリン（旧樺太）方面の河口の方から貨物船に食糧品、即ち塩ザケ、塩マス、塩ダラ、塩ニシン等をビヤ樽のような大きな樽に詰めてコムソモリスクの港に運んで来た品物を、船倉から甲板に揚げなければならぬ。階段があつて、なかなか引き揚げるのが難しい。ロープで巻いて甲板に引き揚げるより手はない。ロスケの労働者もいて、その労働者たちは、樽の壊れたのから前記品物をかっぱらつて、まず彼らが先にバザール闇市に持つて行き、お金に換えて帰つて来る。そこで今度は我々に対し、「見張りをしているから、お前らも取れ、取れ」と言う。なかなか取れる品物がないと、船倉からロープで塩魚の入つた樽をクルクル巻いて揚げると、もう少しで上に揚がるかなあというところで、わざと下へ落とす。下へドスンと落とすと、ボンと蓋が割れて中身の塩魚が顔を出す。そいつを手早く外套の裏に隠したり、ポケットに突っ込んだり

して持ち帰るのである。最初の頃は成功してよかったのですが、そのうち手の内が見つかり出して、なかなかそういうこともやれなくなった。面白くないような、つらいような作業であった。

建築の基礎工事

これは冬場の工事現場のことですが、ビルを建てるに当たって基礎工事をしなければならぬ。直径一メートル、深さ一メートル五十センチぐらいの穴を掘らなければならない。冬期の作業は土面が凍結しているので、なかなか掘るのが容易でない。氷点下四〇度にもなれば、土もコンクリートと変わらない。固くてつるはしが全然立たない。先の尖った鉄棒も歯が立たない。こんなときは約一時間ぐらいかかって薪集めをする。現場がグループ、グループに分かれているので、そのグループごとに集めて来た薪を穴を掘る所に山と積んで、火をつけ燃やす。しかも一時間は焚き火をしてドンドン燃やさなければならぬ。そうする

と土の表面の凍結が解けて、旧軍隊のエンピ、今のスコップよりやや小さいですが、ちょうどあの皿の深さほど掘れる。その掘れた泥を取り除くと、また下は固い。また薪を集めて来て、掘れた穴の中に山と積んで一時間ぐらいドンドン燃やす。そしてまた掘る。このことを繰り返す。氷点下四〇度、五〇度、厳寒の地においてこういう作業をするということはなかなか大変なことで、並の精神力ではとてもできることではない。だからノルマも一〇〇%どころか、五〇%もできない。そうなれば食事の量も減らされ、常にひもじい思いで、私もとうとう栄養失調になった。

コルホーズ（農場）作業

夜明けとともに収容所を出発すると、途中にブタの飼育小屋があつて、十頭ばかり飼っていた。これはちょっと余談になりますが、そのブタの餌に畑からキャベツを取って来て、下葉を除いて、葉っぱの上等部分だけをブタに刻んで与え、下葉

は全部捨てるのです。毎朝そうして捨ててある。

我々はその捨てられたキャベツの下葉を皆と争いながらむさぼり取り、農場に着いてから焚き火をしてその葉っぱを焼いて食べるのです。ブタの餌にもしないキャベツの下葉を、人間が争って食べる。焼くと甘味が出てうまかった。まさに人間の最低生活、落ちぶれたものです。

コルホーズに行つて馬鈴薯の種芋を畑に植えるとき、確か六月ころでしたか、シベリアでは年に一回しか収穫ができません。あらかじめ苗場に線を引き、約四十センチ間隔で種芋を植えて歩く。

ここまでは普通の作業であるが、何と明くる日になると、昨日植え付けたピンポン玉弱ぐらいの種芋をほじくって飯盒に入れて煮て食べるのです。腹が減つては「背に腹はかえられぬ」たとえ話のごとく、悪いことは知りながら、皆平気でやつた。身体の栄養のバランス上、肉体がそう求めたのであろう。

ナホトカ

ソ連に強制抑留されてはや丸二年、二十二年七月のこと、突如ダモイ名簿に載せられて、ナホトカ行きが決まった。夢のような出来事である。嬉し涙がとめどなく頬を伝う。次の瞬間はまた心臓の鼓動が停止しそうな言葉が待っていた。収容所所長から、「お前は栄養失調で骨と皮のように痩せているので、もう少し太ってから帰国しないと、舞鶴でアメリカさんに叱られるとまずいから、今しばらくここに留まって少し太ってから帰す」との達しがあった。まことに残念である。今年の冬、またここで過ごすのか、俺はこの衰弱した体で、とてもシベリアの厳寒を乗り切るとはできないだろうと半ば諦めていた。

だが運というものは、いつ転がり込んでくるかわからない。その後二カ月たって九月十日ころであつたか、二回目の「ダモイ」の命令があつた。何はともあれ嬉しかった。が、まだまだ油断は禁物である。

く治らないかなあ、この日本海の向こうには夢にまで見た日本がある、内地がある。ここまで来てお陀仏するのはまことに残念極まりないと涙が出た。この食中毒で重症の方はお亡くなりになり、また病院に逆送された重病人もおられた。私はこのとき、満二十歳であった。若かったために、一週間ぶりに恵山丸が入港したときには病気が治っておった。

恵山丸の乗組員、看護婦さんに出迎えられて乗船。ソ連には、牡丹江の仮収容所を出て、シベリアの収容所、そしてナホトカと幾たびとなく騙され続けていたので、無我夢中、足早に船へと棧橋を渡っていった。恵山丸が白波を蹴立ててナホトカ港を出港する。イルカの群れに追走されながら穏やかな日本海、あくまでも凧の日本海を四日で横断、やっとの思いで舞鶴に上陸することができた。まさに感無量である。

ナホトカで二千人全員中毒になったということ、は、一生涯忘れることができない事件であった。

また、六時間便所づめだったのも無論のこと、私の脳裏から離れることはない。

最後に一言

ソ連のスターリンは、ポツダム宣言を踏みにじり、日本軍六十余万の労働力を、自国の戦後復興作業に動員するため「東京ダモイ」と欺いてシベリアに連行し、長期抑留を強制した。苛酷な気象条件のもと、劣悪な給与を受けながら強制労働に従事させられ、七万余名の戦友を失った。まことに無念、悲憤を禁じ得ず。そして、今なおシベリアの凍土に眠っておられる戦友のことを思うと、まさに哀感の極みである。

戦争というものは極めて悲惨な結果を残すもの、平和がいかに大切か、世界の永遠の平和を祈念するものである。

【執筆者の紹介】

紹介する前に私事を少し述べます。

私、昭和十四年徴集兵で本年八十四歳となりました。出征前は調理師見習として町内の旅館で見習修業丸五年余り。現役兵として松江歩兵第六三連隊へ入隊。翌十五年八月、満州駐屯のためソ満国境の街、羅北に到着、国境警護の任につき、その後鶴立鎮、興山鎮と部隊移動あり。興山鎮は連隊本部のある街で、大隊長当番兵を命ぜられ、営外居住生活となり調理の腕を買われ、部隊付将校等を官舎に呼び宴を催され、好評でした。この官舎が満炭鶴岡興業所（後に鶴岡炭礦株式会社）で、昭和十八年三月、現地除隊してこの会社へ就職。二年四カ月後の二十年七月二十日、在満在郷軍人の根こそぎ動員によりハルピン混成旅団に召集され、間もなく終戦となりシベリア抑留二年間。

そもそも木次シベリア会の発足は、一昨年逝去された西善寺前任職多賀頼秀氏が檀家の広野氏（シベリア抑留者）宅の法要の宴席で苦勞話が話題となり、町内のシベリア抑留経験者を集め、第

一回目の会合がたしか四十年くらい以前、二十余名で発足した記憶があり、その後、全抑協の全国組織が発足するに当たり星野君の活躍があり、家族や未亡人等の会へ加入もあり、六十数人の会員数とのことです。

会の親睦を深める意味においても、毎年正月に新年会と年一回の一日旅行も欠かさず開催している現状は、星野君の並々ならぬ情熱で、会の運営は彼なしでは成り立ちません。感謝しているのは私一人ではありません。これからもまだまだ頑張ってください。

（島根県 福本 富清）